

## 源順歌と延喜式祝詞

——祝詞の和歌受容について——

### 一

『源順集』に次のような一首がある。

六月、はらへ

なつくさにはらへかくれど久方にあまつゝみとはつゆやけぬら  
(注1) む(西217)

\*歌詞校異 ○かくれとーかくれは(坊・続・仙・雅)

○久方に一人かたの(坊)、ひさかたの(続・仙・雅)

○けぬらむーをくらん(仙)

当該歌は康保二年(九六五)の詠進とみられる「女五男八親王の  
屏風歌」(注2)二三首中のもので、『夫木抄』(巻九・夏部三・荒和祓3764)  
にも、

康保三年屏風、六月ばらへする所

夏草にはらへかくれば人がたのあまつつみとは露やおくらん  
(注3) 順  
の形で収められている。屏風絵における六月祓の絵柄といえ、家  
永三郎氏が指摘されるように「河辺に臨んで祓を修する画面が想像  
され」(注4)、同時代に至るまでの屏風歌でも、

## 西山秀人

六月はらへ

そこみえてながるゝみづのさやかにもはらふることを神はきか  
なん

みなづきばらへ

みそぎする河のせみればから衣ひもゆふぐれに浪ぞ立ける

(貫之集I11、延喜六年月次屏風歌)

はらへするところ

おほぬさにはらへやるともこのかはになみはしるらんふかき  
こゝろと

(元真集I77・朱雀院屏風歌)

六月、河づらにて、はらへするところ

夏の日はずしかりけり河風にはらふる事もかくやなるらん

(兼盛集I198・内裏屏風歌)

六月、河原にはらへし侍ところ

かはなみもなごしのはらへするけふはうかぶかげさへのどけか  
りけり

(能宣集I397・屏風歌)

のように、「底」「水」「川瀬」「川風」「川浪」といった用語を詠む  
ことが一般的であった。ところが、当該順詠の場合は、同じ屏風歌  
でも、

酒者之コノコロノ 恋之繁久コヒノシゲク 夏草之ナツクサノ 苅掃友カリハゲドモ 生布如オヒシクガゴト

(万葉集・卷十・夏相聞・寄草<sup>1984</sup>／人麿集・赤人集)  
 夏草之<sup>ハツクサノ</sup> 露別衣<sup>ツユワケコロモ</sup> 不著尔<sup>キモセヌニ</sup> 我衣手乃<sup>ワガコロモデノ</sup> 干時毛名寸<sup>ヒルトキモナキ</sup>

(同・卷十・夏相聞<sup>1994</sup>／人麿集・赤人集)

などの先蹤歌に依拠したか、「夏草」との関連で「祓」に「払へ」を、わずかの意の「つゆ」に「露」を響かせるというユニークな手法が用いられている。そして、さらに注目しなければならぬのは、当該歌においては和歌用例に殆ど例を見ない「天つ罪<sup>注5</sup>」という語が詠み込まれている点である。「天つ罪」とは須佐之男命が天照大御神に対して犯した罪、すなわち天上の罪をいう。この語は『延喜式』卷八所収「六月晦大祓」の祝詞に、

安国と平らけく知ろし食さむ国中に、成り出でむ天の益人等が過ち犯しけむ雑々の罪事は、天つ罪と畔放ち・溝埋め・樋放ち・頻蒔き・串刺し・生剥ぎ・逆剥ぎ・屎戸・ここだくの罪を天つ罪と法り別けて、(下略)

として見えており、当該歌はそこから詞句摂取を試みたものと推察される。

ところで、順の歌には右のほかにも祝詞を踏まえたと思しき作が幾例か存している。ただし、そうした表現動向は順歌に限ったことではなく、同時代歌人の家集や物語所収歌にも同様の例が散見されるのである。これは和歌表現史的見地からも看過できない現象であるといえよう。

本稿は順歌ならびに他の同時代詠について、祝詞の和歌受容の具体相を探り、それを後撰時代和歌表現の一端として位置付けるとともに、順の和歌表現の一特質を明らかにしようとするものである。

## 二

前章で触れた順歌について今少し検討を及ぼしてみたい。

二・三句「はらへかくれど久方に」は西本願寺本系の独自異文で、他本の多くは「はらへかくればひさかたの」の本文である。確かに後者のほうが語法的にも自然であり、歌意も把握しやすい。ここでは「なつくさにはらへかくれば久方のあまつゝみとはつゆやけぬらむ」と校訂し、以下の論を進めることにしたい。試みに一首を解すと「繁茂した夏草によって六月祓が隠れてしまったならば、『天つ罪』というものは少しは消えるのだろうか。(おぼつかないことだ)」となるが、祓の儀に参集した画中人物の視点からの詠とも、画面を鑑賞する側からの詠とも、どちらにも解釈できよう。

「久方の」を「天つ罪」の枕詞として置くが、これは同じ「アマツツミ」でも「雨障み」(アマツツミと訓むべきか)のほうを詠んだ、久堅乃<sup>トシツナノ</sup> 雨毛落穢<sup>アメモロシ</sup> 雨乍見<sup>アメハミ</sup> 於君副而<sup>オミニツクシテ</sup> 此日令晚<sup>コノヒニシヨク</sup>

(万葉集・卷四・相聞520)

あたりを参酌したものか。<sup>(注7)</sup> 折口信夫氏によれば「アマツツミ」＝「天つ罪」という考え方は昔の誤解に基づくもので、本来は「雨禁」、すなわち霖雨期の物忌を指すものであったらしい。<sup>(注8)</sup> 万葉歌の場合はまさにその意味だが、当該順歌に関しては、たとえば表現的には上掲万葉歌の影響を受けたとしても、あくまでも「天つ罪」として詠まれている。

ところで、「天つ罪」が「消ぬ」とは具体的にどういうことであろうか。以下、「六月晦大祓」の祝詞について見てゆくが、<sup>(注9)</sup> 論述の都合上、当該祝詞の全文をここで引用しておきたい。

六月晦大祓 十二月も此に准へ。

①集はり侍る親王・諸王・諸臣・百の官の人等、諸聞き食へよと

宣ふ。

② 天皇が朝廷に仕へ奉るひれ挂くる伴の男・手襪挂くる伴の男・靱負ふ伴の男・劔佩く伴の男、伴の男の八十伴の男を始めて、官々に仕へ奉る人等の過ち犯しけむ雑々の罪を、今年の六月の晦の大祓に、祓へ給ひ清め給ふ事を、諸聞き食へよと宣ふ。

③ 高天の原に神留り坐す皇親神漏伎・神漏美の命を以ちて、八百萬の神等を神集へ集へ賜ひ、神議り議り賜ひて、我が皇御孫の命は豊葦原の水穂の国を、安国と平らけく知ろし食せと、事依さし奉りき。

④ かく依さし奉りし国中に、荒振る神等をば神問はし問はし賜ひ、神掃ひ掃ひ賜ひて、語問ひし磐根・樹の立ち・草の垣葉をも語止めて、天の磐座放ち、天の八重雲をいつのち別きにち別きて、天降し依さし奉りき。

⑤ かく依さし奉りし四方の国中と、大倭日高見の国を安国と定め奉りて、下つ磐根に宮柱太敷立て、高天の原に千木高知りて、皇御孫の命のみづの御舎を仕へ奉りて、天の御蔭・日の御蔭と隠れ坐して、安国と平らけく知ろし食さむ国中に、成り出でむ天の益人等が過ち犯しけむ雑々の罪事は、天つ罪と畔放ち・溝埋め・樋放ち・頻時き・串刺し・生剝ぎ・逆剝ぎ・屎戸・ここだくの罪を天つ罪と法り別けて、国つ罪と生膚断ち・死膚断ち・白人・こくみ・己が母犯す罪・己が子犯す罪・母と子と犯す罪・子と母と犯す罪・畜犯す罪・昆虫の災・高つ神の災・高つ鳥の災・畜仆し蟲物為る罪、ここだくの罪出でむ。

⑥ かく出でば、天つ宮事を以ちて、大中臣天つ金木を本打ち切り、末打ち断ちて、千座の置き座に置き足らはして、天つ菅そを本刈り断ち、末刈り切りて、八針に取り辟きて、天つ祝詞の

太祝詞事を宣れ。

⑦ かくのらば、天つ神は天の磐門を押し披きて、天の八重雲をいつのち別きにち別ちて、聞き食さむ。国つ神は高山の末・短山の末に上り坐して、高山のいゑり・短山のいゑりを撥き別けて、聞き食さむ。

⑧ かく聞こし食してば、皇御孫の命の朝廷を始めて、天の下四方の国には、罪と云ふ罪は在らじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧・夕べの御霧を朝風・夕風の吹き掃ふ事の如く、大津辺に居る大船を、舳解き放ち艫解き放ちて、大海の原に押し放つ事の如く、彼方の繁木が本を、焼鎌の敏鎌を以ちて打ち掃ふ事の如く、遣る罪は在らじと、祓へ給ひ清め給ふ事を、高山・短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀬に坐す瀬織津比咩と云ふ神、大海の原に持ち出でなむ。

⑨ かく持ち出で往なば、荒鹽の鹽の八百道の八鹽道の鹽の八百会に坐す速開津咩と云ふ神、持ちかか吞みてむ。

⑩ かくかか吞みては、氣吹戸に坐す氣吹戸主と云ふ神、根の国・底の国に氣吹き放ちてむ。かく氣吹き放ちてば、根の国・底の国に坐す速佐須良比咩と云ふ神、持ちさすらひ失ひてむ。

⑪ かく失ひてば、天皇が朝廷に仕へ奉る官々の人等を始めて、天の下四方には、今日より始めて、罪と云ふ罪は在らじと、高天の原に耳振り立てて聞く物と、馬牽き立てて、今年の六月の晦の日の夕日の降ちの大祓に、祓へ給ひ清め給ふ事を、諸聞き食へよと宣ふ。

⑫ 四国の卜部等、大川道に持ち退り出でて、祓へ却れと宣ふ。

前章でも一部引用した⑤は、天孫降臨の後、安国として平らかに

統治されるこの国中に生まれてくる人々が過つて犯した罪すなわち「天つ罪」「国つ罪」について述べた件りである。「天つ罪」と以下に列挙されている八種の罪過は、記紀における天の岩戸の神話に見えるものだが、祝詞ではそれを「天つ罪」という呼称で区別している。一方の「国つ罪」とは国民が犯した罪のみならず災厄汚穢をも含むものである。続く⑥⑦では、このように夥しい罪が出たならば、高天原の天照大御神の儀式―「天つ宮事」と「天つ祝詞の太祝詞事」を大中臣が倣つて行うことで、祝詞は天神地祇の耳に達するであろう、と述べ、⑧の前半部はそれゆえに「罪と云ふ罪は在らじ」、すなわち人間が過ち犯した罪穢は悉く消え失せるとする。如上的内容を勘案すると、大祓の祝詞において「天つ罪」が「消ぬ」という状況は、天神地祇が「天つ祝詞の太祝詞事」を「聞し食」してはじめて人間が犯した種々の罪穢が解除されることを指したものとなり、その種々の罪穢の中に元来天上界の罪であつた「天つ罪」も含まれているということになる。

しかしながら、当該歌の詠出に際して順がそこまで深く祝詞の語彙に拘泥していたとは思われない。たとえば、⑥の「天つ祝詞の太祝詞事」であるが、これが如何なる祝詞を指すかについては諸説あるものの、少なくとも地上の大祓は「中臣上御祓麻」。東西文部(割注略)、上祓刀。読祓詞(割注略)。訖。百官男女。聚集祓所。中臣宣祓詞。卜部為解除(令義解・卷二・神祇令)という次第で催され、祓所では大祓の祝詞が奏申されたわけである。したがって、大祓の儀において人々の罪穢消滅を促すものは、実質的には大祓の祝詞ということになる。その祝詞を神々が「聞し食」した結果、百官男女を始め天下万民の種々の罪穢が消え失せる、当該歌詠作に際しての順の意識というのは、おそらくその程度のもので

あつたろう。

とすれば、「天つ罪」が「消ぬ」とは、人々が犯した雑多な罪穢のうち大祓の祝詞に記されるところの「天つ罪」、それが解除されるという意を示したものと考えておくのが穏当かと思われる。ただし、上二句に「なつくさにはらへかくれば」とあるように、当該歌の内容は「罪と云ふ罪は在らじ」という理想的な罪穢消滅をうたつたものではない。夏草によつて祓の儀が隠されるという状況は、一面中人物の立場からすればその恩恵を被り得ないことになり、絵を鑑賞する側からすればそれは案ずるべきものともなる。ゆえに、「つゆやけぬらむ」という懸念が生じるわけである。

それにしても「夏草」という素材には、やはり唐突の感を拭えない。確かに、画面には祓の儀とそれに参集している人々に加え、繁茂する夏草が背景として描かれていたのかもしれないが、そうした推測をもつてしても夏草が初句に据えられた意図が今一つ理解できない。それを解く一つの鍵となるのが、上掲大祓の祝詞⑧における次の一節である。

彼方の繁木が本を、焼鎌の敏鎌を以ちて打ち掃ふ事の如く、遣る罪は在らじと、祓へ給ひ清め給ふ事を、

⑧は延喜式祝詞中の名文の一つとも言われ、罪穢が除去され浄められてゆくさまを四種の譬喩によつて表しているが、傍線部は最後のに相当する。すなわち「あちら側の岸の生え繁つている繁木の幹をば、焼いて鍛えた鎌、それは鋭い鎌であろうところの鎌で、切つて払ふことのちようどそのまま」一切が浄められ、遣る罪はあるまいと述べているわけだが、実はこの叙述が当該歌上二句の表現形成に少なからぬ影響を及ぼしたものと考えるのである。

夏草に祓の儀が隠れるとは、まさに上掲傍線部に相対する状態で

あるといつてよい。つまり、祓の儀を隠してしまうほど夏草の繁茂が著しければ、祝詞にいう「彼方の繁木が本を、焼鎌の敏鎌を以ちて、打ち掃ふ事」をしていないのだから、「遣る罪は在らじ」とはならないであろう。茫々と生い繁る夏草は罪穢消滅のイメージにはふさわしくないのである。ゆえに、下句では「そんな状態ならば、そう易々と罪は消えまいと思うが、果たして少しは罪は消えるのか」といういぶかしみを呈しているのではないか。幾分皮肉っぽい歌となるが、それは順ならではの諧謔として受けとめるべきであろう。

このような読みには蓋然性が認められるならば、順歌における遊戯性・技巧性は単にレトリックの問題に留まらず、このように引用という一手法においても同様に指摘されてよいものと考ええる。たとえその点はひとまず措くとしても、「天つ罪」という祝詞句の撰取が、順の枠にはまらない言語感覚に起因していることは確かであろう。以上、『順集』27番歌について「六月晦大祓」の祝詞の受容という側面から検討を及ぼしてきたが、そのような視点から改めて順の歌を通観すると、以下についても祝詞との関連が予測されてくる。

六月、はらへ

よきことをきかずあらぶる神だにもけふはあらじと人はしら南

(西173)

\*歌詞校異 ○よきことを—ねきことも(坊・続・仙・雅)

○神たにも—神たちも(坊) ○あらしと—なこしと(坊

・雅)、なこしを(続)、なこしのと(仙) ○しら南—い

ふなり(坊)

当該歌は康保三年(九六六)正月十六日に催された源高明右大臣就任の大饗の料として詠進された屏風歌であるが、『古今六帖』(一・なごしのはらへ・120)『和漢朗詠集』(上・夏・晩夏・170)『深窓秘抄』(夏・35)等の撰集類にも採られ、また長能の「さばへなすあらぶる神もおしなべてけふはなごしの祓なりけり」(拾遺集・夏・134)にも影響を与えているとみられる。初句「よきことを」は「ねきことを」の誤写であろうが、四句中の「あらじと」は俄に判断し難い。他系統および他文献の本文は何れも「なごし」である点からすると、そちらに従っておくべきか。「なごし」の本文であれば「和し」と「夏越」を掛け、今日六月晦日は「夏越」の祓ゆえに「荒ぶる神」さえも「和し」、という理屈に興じた作となる。

さて、当該歌の表現にまつわる諸問題は既に旧稿において触れたが、ここでは「荒ぶる神」について今一度考察を試してみたい。「荒ぶる神」は記紀の天孫臨降説話に見え、天孫に帰順せず荒びすさむ「国つ神」のことをいうが、『古事記』では「道速振る荒振る国つ神」「荒ぶる神」と記されているのに対し、『日本書紀』では「蛍光なす光る神」「蠅声なす邪神」と形容されている。和歌世界においては、ようやく平安中期に至り、

けふよりはなごしのつきになりぬとてあらぶるかみにものなる  
なひと  
(好忠集I155・毎月集・六月初)

みなづきのなごしとおもふころにはあらぶるかみぞかなはざ  
りける  
(好忠集I388・百首・夏)

四月一日、をんなに  
けふよりはなつのころもにことよせてあらぶるかみもあらじと  
ぞ思ふ  
(兼澄集II64 二句底本「なつのこもの」)

のように、好忠・兼澄そして順と、いわゆる河原院周辺歌人の詠歌

に登場してくるのであるが、おそらくその嚆矢となつたのは好忠百首の「みなづきの」の歌であつたと推察される。したがって、当該歌は好忠百首詠の影響のもとに成立した可能性が強いと考えられるのであるが、それに加えて上掲「六月晦大祓」の祝詞における④の叙述をも視野に含めると、六月祓と「荒ぶる神」との関係が一層明瞭となる。

上掲祝詞の③から④にかけては天孫降臨神話の骨子ともいふべき内容が記されるが、「荒振る神」の中でも「神問はし問はし賜ひ」すなわち帰順するか否かを問い正したにもかかわらずなおも暴威を振るう神を、当該順歌では「ねぎごとを聞かず荒ぶる神」と詠んだものと思われる。ちなみに、上掲好忠百首「みなづきの」の歌について、二句中の「なごし（和し・夏越）」と思ふ心を「皇御孫の命」の「豊葦原の水穂の国を、安国と平らけく知ろし食」さんとする心の意とれば、下句「荒ぶる神ぞ叶はざりける」は、まさに④の「神掃ひ掃ひ賜ひて」という状況と合致する。

如上の考察からすれば、順歌・好忠百首歌ともに大祓の祝詞を念頭に置いた作と考えてよさそうであるが、順の場合、あえて六月祓題の屏風歌において誰もがそれと知るとする祝詞句を引用したところ、彼なりのねらいがあつたものと思われる。そうした歌作姿勢が果たして文学的に真摯なものであつたかどうかは幾分疑わしいが、少なくとも物言わぬ絵にリァリティを付与すべく思考した痕跡はそれなりに窺われよう。

次の例は仏名会の場面を詠じた屏風歌だが、その表現が著しく祝詞的なので挙げておきたい。

十二月、仏名

よをさむみ風さへはらふやどなればのこれるきみがつみはあら  
じな（西223）

\* 歌詞校異 ○やとなれば―よはなれば（坊） ○つみは  
あらしな―つみもあらしな（坊・仙・雅）

上掲217番歌と同じく康保二年「女五男八親王屏風歌」中の一首。仏名題の屏風歌と祝詞とは一見何の関係もなさそうに思えるが、表現的側面から上掲祝詞との比較を試みると、当該歌が極めて祝詞的な世界を内包していることに気づかされる。

「夜寒ゆえふだんは種々の物を掃い尽くす風までもが掃われてしまふ、そんな状況ならば一年の罪障をも容易く掃ってくれるだろうから、残っているあなたの罪はあるまい」というのが一首の解であるが、仏名詠において「はらふ」の語を用いることは極めて珍しい。また、「罪」を詠むこと自体は常套の範疇だが、先行歌の多くは「罪」が「消ゆ」「消ぬ」などと結んでおり、「罪はあらじ」という表現は、当該歌の影響歌と思しい、

そこばくの仏の御なをみなきけばのこれる罪もあらじと思ふ  
（永久百首・仏名410・忠房）

の一首を見るのみである。  
そのような点からすれば、当該歌は仏名詠としてはやや異質な詠法をとつたものといえるが、ここで再び上掲「六月晦大祓」の祝詞の⑧に目を向けてみたい。

天の下四方の国には、罪と云ふ罪は在らじと、科戸の風の天  
の八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧・夕べの御霧を朝風・  
夕風の吹き掃ふ事の如く、（中略）遺る罪は在らじと、祓へ給  
ひ清め給ふ（下略）

傍線を付した用語・表現が当該歌とまさに合致していることが看取されよう。もつとも、祝詞における風は雲や霧を消散させるものとして登場しているのに対し、当該歌の風は上述したように寒気によつて掃われる存在である。その点幾分の齟齬を見せるが、当該歌はあくまでも祝詞の用語・表現のみを借用したものと見なせば、それほどこだわる必要はないであろう。

さらに、上掲祝詞に依拠した歌として次章⑥・⑦のような例を挙げることができるが、これらは六月祓を背景としながら当該歌と同じく「罪はあらじ（な）」の詞句を詠み込んでいる。つまり、当該歌の詠みぶりは「夜を寒み」「宿」といった語句をとりはらえば、祓に材を求めた⑤・⑥のような歌とさして違いはないのである。ゆえに、当該歌は仏名詠でありながら、その表現は祝詞仕立てであるといつてよいものと思われる。順がなぜそのような詠法をとったのかは不明であるが、やはり彼らしく奇をてらうところもあつたのではなからうか。

次の例は豊受大神宮における神嘗祭の祝詞との関連が予想される。なお、詞書については諸本間の異同が目立つので、各系統別に本文を併記する。

伊勢規子内親王の群行のゝちかへるあしたに、斎王の御前にて饗・祿等たまふに、をとこをむなうたよむにたてまつる（西）

伊勢規子斎内親王群行のゝち長奉つかひ□□□たの権中納言藤原朝臣某□あしたに斎王御前にてかうまうけてろくたまふに男女哥よむにたてまつる（坊）

伊勢規子斎内親王群行の後長奉送使中納言藤原朝臣の京に

かへる朝斎王御前饗儲て祿給に男女哥よむれうに奉（統）  
伊勢規子斎宮内親王群行のゝち長奉送使ひろわたの中納言京にかへり給ふに斎王の御前にて饗まうけ祿給ふに男女哥よむとてたてまつる（仙）

伊勢規子斎内親王長奉送使ひろはたの中納言京にかへりたまふ斎王のおまへにて饗まうけ祿たまふにおとこ女うたよむにたてまつる（雅）

神のます山だのはらのつるのこはかへるよりこそちよはかぞへめ（西271）

\* 歌詞校異 ○山だのはら—やちたの橋（統） ○つるのこは—つるのはゝ（歌） ○かへるよりこそ—うへるよりにそ（統） ○かそへめ—かすへめ（坊）

諸本の詞書内容を勘案すると、当該歌は貞元二年（九七七）九月某日、規子斎内親王を伊勢まで監送した長奉送使広幡中納言の帰京に際して、その賜饗の席で順が詠進した一首と判断される。『玉葉集』の詞書では「規子内親王、伊勢のいつきにくだり侍りけるに、中納言庶明長奉送使にてかへりまうしの時、祿など給ふとて人歌読み侍りけるに」（巻七・賀1045）と、広幡中納言に源庶明を当てているが、所京子氏の考証によつて権中納言藤原顕光であることが確定的となつた。坊本の詞書に「権中納言」と記されていることも、その一つの傍証となろう。規子内親王の伊勢下向は『日本紀略』によれば同年九月十六日であつたことが知られるが、この頃無官の身であつた順は、おそらく一時の職を求めて伊勢下向に随つたものと思われる。それゆえに「斎王の御前にて」当該歌を詠み得たわけである。「かへる」には長奉送使が「帰る」意と「解る」が掛

けられ、同行した母徽子女王のために「鶴の子」すなわち規子斎王の千歳を寿いだ体となっている。

ところで、当該歌において神の坐す所と詠まれた「山田の原」であるが、同地は『八雲御抄』(巻五・名所部)に「やまだの<sup>伊勢</sup>(神宮也。〔西行〕外宮〔の〕御在所〔也〕)」とあるように、外宮すなわち豊受大神宮(等由氣大神宮)の鎮座地である。西行の「きかずともここをせにせむ時鳥山田の原のすぎのむら立」(新古今集・巻三・夏217)をはじめ中世和歌では代表的歌枕として定着をみているが、それ以前の確実な和歌用例としては、上掲順歌のほか、寛治八年(一〇九四)八月十九日開催「高陽院七番歌合」の出詠歌、

よろづよといのりぞへくるきみがよは山田のはらのしもついはねに(63、祝・四番左・讃岐)

を挙げるにとどまる。今一首『斎宮女御集』所収の、

なにごとのをりにか

かすみたつやまだのそらのまつがえはいくよのはるにあへるいろぞも(II 192)

について、第二句「やまだのそら」を「やまだのはら」の誤写とみる見解<sup>(注18)</sup>に従うとすれば、右歌は順に最も近い歌作例として注目に値しよう。ただし、当該歌との先後関係については不明である。

延暦二十三年(八〇四)に外宮から朝廷に提出された『止由氣宮儀式帳』には、上述した外宮鎮座の所伝が記されている。すなわち、「等由氣大神」はもと丹波国比治の真奈井に斎き祭られてあつたが、天照大御神が雄略天皇の夢の中でその旨を告げ知らせ、「我御饌都神等由氣大神<sup>乎</sup>我許欲」と述べたので、

尔時天皇驚悟賜<sup>ヲ</sup>、即從丹波国令行幸<sup>ヲ</sup>、度会<sup>乃</sup>山田原下石根<sup>乃</sup>宮柱太知立高天原<sup>尔</sup>知疑高知<sup>ヲ</sup>、宮定斎仕奉始<sup>仕</sup>

こうして当地に遷し奉り、鎮座されたというのがそのあらましである。してみると「神の坐す山田の原」と詠まれている当該歌は、この外宮鎮座伝説を踏まえている可能性が強そうである。

しかし、ここで注意しておきたいのは当該歌の詠作時期が九月下旬頃と推定される点である。九月といえは神嘗祭の時期に当たり、『延喜式』に、

右月十六日祭<sup>ニ</sup>度会宮<sup>ニ</sup>。十七日祭<sup>ニ</sup>太神宮<sup>ニ</sup>。祢宜。大内人各著<sup>ニ</sup>明衣<sup>ニ</sup>。分<sup>ニ</sup>頭左右<sup>ニ</sup>。宮司立<sup>レ</sup>中。次使忌部捧<sup>レ</sup>幣。次馬。

次使中臣。次使王。入就<sup>ニ</sup>内院版位<sup>ニ</sup>。使中臣申<sup>ニ</sup>祝詞<sup>ニ</sup>。訖亦神宮司宣<sup>ニ</sup>祝詞<sup>ニ</sup>。余義同<sup>ニ</sup>月次祭<sup>ニ</sup>。(巻四・神祇四・伊勢大神宮)

とあるごとく、十六日には豊受大神宮、翌十七日には皇大神宮にて祭儀がとり行われる。ことに、前者豊受宮においては次のような祝詞が奏申されるが、実はその文中にも「山田の原」の地名が見えてるのである。

天皇が御命を以ちて、度会の山田の原に称へ辞竟へ奉る皇神の前に申し給はく、常も進る九月の神嘗の大幣帛を、某の官某の位某の王・中臣の某の官某の位某の姓名を使と為て、忌部の弱肩に太極取り懸け、持ち斎まはり捧げ持たしめて、進り給ふ御命を、申し給はくと申す。

右祝詞の存在を重視するならば、順は上述した外宮鎮座の伝説に加え、九月という時節を考慮して同月の祭儀たる豊受宮神嘗祭の祝詞をも念頭に置きつつ「山田の原」を詠み込んだのではないかと推察される。ちなみに、順は前年八月二十八日、「初斎宮侍従のくりやに御坐するあひだ」の庚申御遊において、

かみよゝりいろもかはらぬたけかはのよゝをばきみぞかぞへわたらん(西255)



の一首を詠じているが、この歌は催馬楽で知られる「竹川」と斎宮所在地の「多気川」を掛けたものである。<sup>(注21)</sup> 当該歌があえて外宮の「山田の原」を詠み入れた要因として、時期的に豊受宮神嘗祭の存在を無視することはやはりできないであろう。

次の例は直接祝詞の語句を撰取しているわけではないが、祝詞奏申に際してのいわゆる「称唯」を踏まえている可能性がある。

おもひをも恋をもせじのみそぎすとひとがたなでゝはてくは  
しお（西40）

\*校異 ○恋をもせしの—こひをもせゝの（坊）、こひを  
もせゝに（仙） ○みそぎすと—みそぎする（仙） ○な  
てゝ—なてし（坊・雅） ○はてくはしお—はらへ  
て人お（坊）、はてくはおし（続）、はらへてはおゝ  
（仙）、はてくはおゝ（雅）

「あめつちの歌」四十八首「思」部所載の一首。本歌群が當時流布していた誦句「あめつちの詞」四十八音を沓冠に据えた連作であることは説明を要しまい。その誦句「あめつちほしそら……ゆわさるおふせよ」の「お」文字を頭尾に置いたのが当該歌である。上三句は『古今集』の「恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも」(恋一501・不知)を下敷きとし、四句は「下官以下解繩撫人形」(兵範記・仁安三年八月二十三日)と同じく祓の実態に即した表現がなされている。ちなみに、「人形」は『倭名類聚抄』にも「偶人 史記云、土偶人、木偶人、偶音五狗反、俗云三比度加太」、野王案凡刻三削物「為人像」、皆曰「偶人」(卷五・調度部・祭祀具)として見える。もつとも、当該歌の「禊」が六月祓のそれ

を指したものがどうか歌詞からは即断できないが、たとえば六月祓の場面を詠じた先蹤の屏風歌では、

つらき人わすれ南とてはらふればみそぐかひなく恋ぞまされる(注25)

(西本願寺本貫之集236)

みなづきにはらへしたる所

はらへてもはらふる水のつきせねばわすられがたき恋にざりける  
(同247)

のように、当該歌と同様「恋せじの禊」が詠まれている。その点を勘案すれば、当該歌は「思」部に収められているが、内容的には六月祓そのものが主題となつていてと考えてよいであろう。

問題となるのは結局「はてくはしお」をどう解釈するかである。「はてくは」は「果て果ては」―あげくのはてに、最後には、の意。「はらへては」の本文もあるが、無理に校訂する必要はない。だが、「しお」については、このままではどうにもならない。原田真理氏は西本願寺本系の「しお」の本文を尊重し、「人形が流れて海へゆく意と清めの塩をかけた」と注するが、仮名遣いの誤用についての説明が一切なされておらず、従い難い。そこで、再び他本の本文に目を向けると、仙・雅本には「おゝ」とある。同じく仙本系の陽明文庫本（近・サ・65）、内閣文庫蔵本（201・433）、彰考館本（巳5―<sup>06923</sup>）、中田光子氏蔵本、長野真田家蔵本・多和文庫蔵本も「おゝ」の本文であるが、書陵部蔵本（501・272）、静嘉堂文庫蔵本（521・11・<sup>22327</sup>）では「をゝ」と表記される。これら仙本系の本文に従うとすれば、この「おゝ」は「集はり侍る神主・祝部等・諸聞き食へよと宣ふ。」神主・祝部等共に唯と称せ。余の宣ふも此に准へ。（祝詞・祈年祭）にみえる「唯（をを）」を指したものではなからうか。

「唯」というのは承諾のことばで、祝詞奏申の場では一同がその

旨を謹んで承る意の応答として唱えるものである。「余の宣ふも此に准へ」とは、以下の「宣」すなわち「諸聞き食へよと宣ふ」のところもそのように称唯せよという指示で、他の祝詞についても有効である。これを「六月晦大祓」の祝詞に当てはめてみると、上掲本文①・②・⑪・⑫の「宣ふ」のたびに称唯が行われるということになるが、『儀式』に「訖中臣趨就座読祝詞、称聞食刀禰皆称唯」と記されるごとく、それは刀禰たちによつてなされていたらしい。

この称唯を当該歌の「おゝ」に当てはめてみれば、確かに歌意は理解しやすくなる。だが、「唯」の訓はワ行の「をを」とされている。<sup>(注28)</sup>この時代の仮名遣いではまだ「を」「お」の混用は生じていなかったであろうから、「おゝ」「唯」とすれば、順は誤用と知りつつも文字の制約上やむなく「お」の仮名を代用したと考えざるを得ない。神楽などの囃し詞の「おお」を想定する向きもあろうが、六月祓との関連性に乏しい。上述してきた順歌の祝詞句受容という詠歌傾向を鑑みれば、ここはやはり、順がア行の「お」を代用して「唯」の語を示したとみておくのが穏当ではなからうか。上述した書陵部蔵本・静嘉堂文庫蔵本の「をゝ」の表記は、そうした意味では極めて示唆的なものといえよう。

今一つの存疑は、『兵範記』が「荒見河祓」の儀に際して「下官取大麻撫之、為定返史生、(中略)兼貞捧大麻発声読祭文、兼行又読之、<sup>先祭文、中臣祓、</sup>次下官以下解繩撫人形、祓畢撤贖物」(仁安三年八月二十三日)と、「中臣祓」(大祓の祝詞のことか)「撫人形」の順で祓の次第を記している点である。当該歌では、「おゝ」を上述のように解釈すれば、人形、祝詞奏申の順で齟齬を見せるが、同記仁安三年六月二十九日の条では、「晩頭於朱雀門大祓事(中略)次神祇官人居撫物、次大祓如例、引大麻」とも記されている。波線部に

いて大祓の祝詞奏申をも含んだ上の記載とみれば、ひとまず矛盾は消えようかと思う。やや付会に過ぎた感なきにしもあらずだが、当該歌が結果的に六月祓を主題としていることを鑑みれば、一首の読解は上述のような方向でなされるべきものと考ええる。

如上の私見に蓋然性が認められるならば、当該歌は「もう物思いも恋もするまいという禊を行うということで、人形を身体中に擦りつけて(禍を移し)、最後には(祝詞を奏申し、一同)『唯』(と唱えることだよ)」の意に解され、一応筋の通った内容が詠まれているということになる。

以上、本章では順歌における祝詞受容の可能性についていささかの考察を試みた。中には上掲40番歌のように苦しまぎれのものも存するが、残り四首から窺われた祝詞句摂取の諸相は、ある特定のこゝとばや表現への注目から一首を構築しようとする順の和歌詠作の姿勢を如実に示している。とくに、217番歌の「天つ罪」に関しては、現存資料に拠る限りにおいて平安和歌の用例は皆無であり、極めて個性的な用語摂取といつてよい。また、神祇性の強い祝詞の世界を和歌にとり込んだところに、後撰時代和歌の新たな表現動向が看取されるようでもある。その点の裏付けを行うべく、次章では同時代和歌を中心とした祝詞受容の様相について触れてみたい。

### 三

祝詞の和歌摂取という手法自体は決して新しいものではなく、その萌芽は古く万葉歌において認められる。

#### 造酒歌一首

④ 奈加等美乃 敷刀能里等其等 伊比波良倍 安加布伊能知毛

多我多米尔奈礼

(万葉集・卷十七 4031・家持)

上二句は『袖中抄』が「なかとみのふとのりとごとくは中臣祓賦」<sup>(注29)</sup>と注しているように、おそらくは「六月晦大祓」の祝詞⑥「大中臣(中略)天つ祝詞の太祝詞事を宣れ」を踏まえたものとみられる。酒造りに際して祝詞を唱えるのは、「祝詞の詞句を借りて神聖な白酒・黒酒を諸国の国つ神に献ずる趣であろう」<sup>(注30)</sup>か。ともあれ、右の家持歌が以下に挙げる平安時代の歌作例と同様、大祓の祝詞と表現的関連を有していることは、祝詞受容の嚆矢として注目されてよい。

平安時代に至ると、祝詞句は六月祓題の歌を中心に摂取されるようになる。

六月はらへするところに、をとこきあひて

年中に我なげきどのなりぬればみそぐともよにうせじとぞ思返し

⑥ なげきをなべてはらふるおほぬさははやかはのせにながれいでぬめり  
(伊勢集 I 41~42・藤原温子屏風歌)

⑦ は『古今集』の「おほぬさのひくてあまたになりぬればおもへどえこそたのまざりけれ」(恋四 706・不知)を踏まえ、三句以下は「あなたの心は早々と他の女性の方へなびくことでしょう」の意を込める。「早川」は流れの速い川のこと。『万葉集』にも見えるが、ここは上掲「六月晦大祓」の祝詞⑧の「高山・短山の末より、さくなどりに落ちたぎつ速川の瀬に坐す瀬織津比咩と云ふ神、大海の原に持ち出でなむ」を踏まえている可能性が高い。六月祓題の屏

風歌を詠作するにあたって、伊勢はさりげなく祝詞句の摂取を試みているようだ。

ただし、そうした手法が古今集歌壇全体に広まった形跡はなく、同断の例が徐々に増え始めるのは後撰集時代を迎えてからのことである。次に後撰から拾遺期にかけての歌作例を挙げる。

またしのびて物いひし人の、見つけていひければ、たえてあはで、ものごしにあひたりける、きぬをひかへたりけるを、ぬぎすてゝいりければ  
いまさらに身のしろごろもたかはらでをもと□□せるつみはおひにき

かへし

⑧ ひとかたにみそぎてしかばことせめてつみといふつみはあらじとぞおもふ  
(為信集 95~96)

⑨ やしほぢのなみのたかきをかきわけてふかくおもふとしるらめやそも  
(好忠集 I 414・百首・恋)

⑩ みゝとがはやほろづよの夏ごとなごしのみこそきゝわたらなむ  
(元輔集 III 44)

六月、かはのうへに人くふねにのりてあそぶところ  
⑪ けふはなほのらじとぞおもふかはぶねになごしのはらへともゝこそとけ  
(能宣集 I 138、右兵衛督忠君朝臣屏風歌)

六月つごもり、御はらへの日、あるやかきのまへをわたれ

ば

⑧さをしかのみふりたてゝ神もきけ

といふ人あり

をむとをかせるつみはあらじな（実方集II 64 a b）

⑨きよきせになごしのはらへしつるよりやを万代はかみのまに

く（和泉式部集I 321）

なき事をひてなげくと聞て、われをあまがつにせよといひ  
たるに

⑩あまがつにつくともつきじうき事はしなとの風ぞ吹もはらはむ  
（和泉式部集I 826）

⑪あらしほの塩のやほあひに焼く塩のからくもわれは老いにける  
かな（九品和歌14）

⑫の為信詠は初句「ひとかたに」に祓具の「人形」を掛けるが、  
下句は上掲「六月晦大祓」の祝詞⑧に見える詞句「罪と云ふ罪は在  
らじ」をそのまま引用したものである。⑬の好忠詠では先行歌に用  
例のない「やしほぢ」という用語を詠み込むが、これも大祓の祝詞  
⑨に「荒鹽の鹽の八百道の八鹽道の鹽の八百会に坐す速開津咩と云  
ふ神」と出ているものである。⑭の元輔詠は安和二年（九六九）十  
二月九日、太政大臣藤原実頼七十賀の折の折敷の裝飾歌だが、後藤  
祥子氏<sup>（注31）</sup>が指摘されているように、同祝詞③「八百萬の神達を神集へ  
集へ賜ひ（中略）安国と平らけく知ろし食せと、事依さし奉りき」  
を踏まえた祝詞仕立の歌とみられる。⑮の能宣詠は判りにくいが、  
結句「ともゝこそとけ」は同祝詞⑧の「大津辺に居る大船を、舳解

き放ち鱸解き放ちて」を念頭に置いた表現と思われる。⑧の実方集  
所収の連歌は⑬と同様「罪と云ふ罪は在らじ」の詞句に依拠する  
が、加えて発句「さをしかのみふりたてゝ」云々は、すでに諸注<sup>（注32）</sup>  
で注意されているように同祝詞⑪「高天の原に耳振り立てて聞く物  
と」からの摂取であろう。「朝野群載」所収の中臣祭文ではこの箇  
所が「祓戸乃八百万乃御神達ハ佐乎志加乃御耳ヲ振立天。聞食セト  
申<sup>（注33）</sup>」のように改変されており、より一層掲出歌の表現に近くなつて  
いる。祝詞の後世的変容を窺わせる好例といえよう。⑯の和泉式部  
歌は⑬と同じく大祓の祝詞③から、⑰は同祝詞⑧「科戸の風の天の  
八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧・夕べの御霧を朝風・夕風の  
吹き掃ふ事の如く」からの用語摂取。⑱は出典未詳歌だが、上句は  
「荒鹽の鹽の八百道の八鹽道の鹽の八百会に」の箇所を引用したも  
の。なお、同じく典拠未詳の、

⑫なかとみのあまのすがそをたつみそぎ折りし神はけふのためこ  
そ（袖中抄842）

は、同祝詞⑥「大中臣天つ金木を本打ち切り、末打ち断ちて、（中  
略）天つ菅そを本刈り断ち、末刈り切りて」を上句に引用するが、  
これは上掲⑬の万葉歌をも踏まえた古歌であろうか。

如上の考察より、祝詞句の受容という和歌詠作上の一手法は、後  
撰時代を皮切りに諸歌集に散見されてくるのであるが、中でも好忠  
や河原院周辺の歌人たちの間でしばしば用いられている点は興味深  
い。前章で確認し得た順歌の方向性も、そのような当代歌人たちの  
表現動向と軌を一にするものといえそうである。もつとも、それは  
彼らの歌に共通して窺われる漢詩文の受容という特質<sup>（注35）</sup>に比べれば、  
いたって地味な現象であろうが、この時代になつてようやく自覚さ  
れつつあった一つの詠歌傾向として捉えることはできようかと思わ

れる。その点を如実に裏付けているのが、次掲『宇津保物語』菊の宴における上巳の祓の件りである。

かくて、弥生の十余日ばかりに、初めの巳の日出で来たれば、大將殿には、上巳の祓へしに、難波へ、方々、男君たちも、残り少なくおはします。(中略)

湊に御祓へし給ふほどに、春宮より、かく聞こえ給へり。

遙々と行く川ごとに祓ふともわが嘆きをば離れしもせじあて宮、うち笑ひ給ひて、「腹汚くも、はた」などて、

(1) 禊には嘆きの花も散りぬらむ八重雲払ふ風の寒さに

かくて、難波に出て給ふほどに、畿内・山陽道・南海道の受領ども集ひて、おはしますべき所を、ありがたく面白うなし、花の林、浦のまに植ゑ並べ、同じき砂子・同じき岩、ありがたくをかしき姿に調じて、よろづの御設けをして待ち候ふに、御船ども漕ぎ連ねて、よろづの上手、船歌に、物の音ども吹き合はせて、船ごとに遊び返りておはします。万歳衆の声に御唱歌して待ち奉る。

かくて、御船ども漕ぎ寄せて、御船ごとに祝詞申して、一度に御祓へするほどに、藤中將の、御祓への物取り具して奉る、黄金の車に黄金の黄牛懸けて、乗せたる人・つけたる人、皆金銀に調じて、かく聞こえ奉る。

(中略)

源中將、同じ様に調じて、かく聞こえたり。

(2) 恋ひせじの禊の船も漕ぎ寄らば大海の原に解きや放たむと聞こえたり。「物も言はでかへせほあれ」とて、中納言の君して、かく言はせ給ふ。

(3) 禊して見ぬより人を忘るてふ船を放たぬ風やなからむとて、皆返し遣はしつ。<sup>(注36)</sup>

文中の傍線部(1)・(3)の和歌は、すでに諸注が一部指摘しているように<sup>(注37)</sup>、いずれも「六月晦大祓」の祝詞⑧に依拠した表現がなされている。また、波線部では僅かながら祝詞奏申についての記載があり注目されるが、上述の三首は物語の読者に対して、船中で詠まれた祝詞の唱詞を自ずと連想させる役割をも担っている<sup>(注38)</sup>。それは前章で考察した順屏風歌の趣向にも通じるものがあるといえるが、いずれにせよ後撰から拾遺期にかけて歌壇に浸透しつつあった祝詞受容の詠法が、『宇津保物語』所収歌にも影響を与えていることは確かであろう。そして、このような『宇津保』所収歌の性格は、近年改めて指摘されつつある順・好忠ら当代歌人詠との表現的関連という問題にも抵触するものでもある。

なお、同断の手法は『源氏物語』にも、

知らざりし大海の原に流れきてひとかたにやはものは悲しき

(須磨216・光源氏) ↓ 「六月晦大祓」の祝詞⑧

八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ

(同217・光源氏) ↓ 同祝詞③

海にます神のたすけにかからずは潮のやほあひにさすらへなまし

(明石219・光源氏) ↓ 同祝詞⑨

という形で見られるが、以上述べてきた祝詞句の和歌受容という一詠法は、後世においても、

御集、三首御歌、荒和祓

後鳥羽院御製

うきをはらふ大海の原にみそぎして浪もあらぶる神やみつらん

(夫木抄・夏部三・荒和祓・3794) ↓ 同祝詞④・⑧

## 家集 神祇

権僧正公朝

八重雲をしなとの風にはらはせて神あそびするくにはやすくに

(夫木抄・雑部一・風7761) ↓同祝詞⑧  
保延四年権中納言経家卿家歌合、月 大江維順朝臣

山のはをしなとの風は吹きはらへかたぶく月やしばしとまると

此歌判者基俊云、右しなとの風吹きはらへと侍れども、  
中臣ばらへと聞く様におぼえ侍ると云云

(同 7762) ↓同祝詞⑧

のように受け継がれていくのである。

## 四

以上、本稿においては源順歌を中心に、他の同時代詠も視野に含めながら祝詞の和歌受容の具体相を探ってみた。その結果として次のような点が指摘された。

- (1) 順歌については217番歌の「天つ罪」をはじめ、祝詞句の摂取が推定される歌作が幾首も見出されるが、そうした詠歌傾向はおおむね順の言語的興味に根ざしたものと考えてよさそうである。

- (2) この詠法は早く万葉歌にその萌芽が認められるが、歌人たちがあつた種の表現的意義を認め、自覚的に用いるようになったのは後撰集時代からである。とくに好忠や河原院周辺歌人の歌作例が目立つのは、一時的な流行を呼んだものか。(1)で指摘した順歌の特性も、そうした当代歌人たちの表現動向と軌を一にするものともいえそうである。ただし、多くの例は「六月晦大祓」の祝詞の摂取にとどまっている。

- (3) 『宇津保物語』所収歌においても右と同様の傾向が看取され

るが、これは順・好忠ほか河原院周辺歌人詠の表現動向が、本物語の和歌にも何らかの影響を及ぼしているのではないか。

- (4) 上述の詠法は、量的には多くないものの後世の和歌にも踏襲されている。

しかし、だからといって順歌の表現指向が他の周辺歌人詠と等質なものであったとは即断できない。順歌の表現には好忠歌などには見られない、一種独特のひねりがある。時としてそれはウィットでありアイロニーでもあるわけだが、なぜ彼が歌作に際してそのような姿勢をとり続けたのか、従来指摘されてきた沈淪嗟嘆・不遇の慰謝という観点からでは説明しきれない要素も多い。他日を期して考えてみたい。

## (注)

- 1 以下、『順集』の本文は『西本願寺本三十六人家集』(昭46 墨水書房)の影印をもとに、私に清濁、句読点を定め、適宜異文本文を注記した。歌番号は『私家集大成』中古I「順II」のそれに従った。また、『順集』の伝本は『和歌大辞典』によれば次のように二類五系統に分かたれる。各系を代表する諸本の名称は、断りのない限り以下の略称をもって示した。

- 一、①西本願寺本三十六人集系 ……西  
②冷泉家時雨亭文庫蔵坊門局筆本 ……坊  
③宮内庁書陵部蔵「続小草内和歌」(501・49) ……続  
二、①正保版本歌仙家集本系 ……仙  
②宮内庁書陵部蔵「御所本三十六人集」(510・12、雅平本) ……雅

なお、略称については旧稿で使用したものを改めた。

- 2 当該屏風の制作事情については、家永三郎氏『上代倭絵年表』

- (座右宝刊行会 昭17、改訂版昭41 墨水書房)、田島智子氏「屏風歌の制作法―長保元年彰子入内屏風をめぐる―」(大阪大学『語文』47輯 昭61・4)、松本真奈美氏「曾禰好忠『毎月集』について―屏風歌受容を中心に―」(『国語と国文学』68巻9号 平3・9)に言及がある。『順集』諸本の詞書は「康保五年女五男八親王の御屏風のうた」(西)、「かうほう三年女五なん八のしんわうの御屏風の哥」(坊)、「御屏風の哥」(乙)、「康保二年女五男八親王御屏風歌」(仙・雅)などと揺れがあり、同時詠と思しき『中務集』所載の屏風歌群も、「村上の先帝の御屏風のゑに」(I 35詞)、「村上先帝御時の月なみの御屏風に」(II 50詞)と決め手を欠く。ひとまず田島説に従い、康保二年八月二十七日に同時に催された村上天皇第四皇子為平親王元服の儀と同第八皇女輔子内親王始笄の儀(『日本紀略』の料歌としておくのが穏当かと思われるが、ただし同年八月二十日に同第五皇女盛子内親王の始笄の儀が行われていることにも留意しなければなるまい。
- 以下、和歌本文の引用は断りのない限り『新編国歌大観』に拠り、私家集のみは『私家集大成』を用いた。ただし『万葉集』の歌番号は旧国歌大観番号に拠り、私家集本文には私に清濁を定めた。
- 5 『上代倭絵全史』(昭21 高桐書院、昭41 墨水書房)
- 4 順歌以外の和歌用例としては、『賀茂翁家集』所載の、  
枝直が家には、六月祓を  
天つ罪はらふゆふべは雲み吹く風もすずしくなりにけるかな  
(134)  
年のくれに祓するかたを  
もろともにつもり来にける天つ罪雪より先にまづやきゆらん  
(247)  
の二例を見るのみ。
- 6 延喜式祝詞の本文は『東京国立博物館蔵本 延喜式祝詞総索引』(平7 汲古書院)の訓読文に拠る。ただし、漢字は通行の字体に改め、私に改行を施した箇所がある。
- 7 「雨障み」は『万葉集』では他に三例(519・1570・2684)見えるが、平安和歌では『古今六帖』(346)、万葉集2692の異伝歌『堀河百首』(696)に各一例を見るのみである。
- 8 「祝詞 六月晦大祓」(折口信夫全集 ノート編第九巻 昭46 中央公論社)
- 9 以下、祝詞の解釈に際しては次田潤氏『祝詞新講』(昭2 明治書院)に負うところが大きい。
- 10 『令義解』の本文は『新訂増補国史大系』に拠る。
- 11 注8掲出書の口訳による。
- 12 ただし作者名は「愛宮」とある。
- 13 ただし下句自体は「けふのなごしのはらへといふなり」(古今六帖)、「けふはなごしとひとはいふなり」(和漢朗詠集)、「けふはなごしのひとはいふなり」(深窓秘抄)と小異がある。
- 14 西山秀人「源順の歌風について―源高明大饗屏風歌を中心に―」(『古典論叢』22号 平2・8)
- 15 『斎王和歌文学の史的研究』(平1 国書刊行会)
- 16 「十六日癸卯。伊勢斎宮規子内親王從三野宮「禊三西河」。参三向伊勢斎宮」。天皇出レ自三承明門建礼門。御三小安殿「奉送」(貞元二年九月、本文は『新訂増補国史大系』に拠る)。
- 17 『八雲御抄』の本文は『日本歌学大系』別巻三に拠る。
- 18 平安文学輪読会『斎宮女御集注釈』(昭56 塙書房)。なお、同書では「かすみたつ」の歌を「伊勢下向ののち何かの折にふれての述懐」歌とみる。
- 19 『止由気宮儀式帳』の本文は『日本祭祀行事集成 第三巻』に拠る。
- 20 『延喜式』の本文は『新訂増補国史大系』に拠る。

- 21 山中智恵子氏『斎宮女御徽子女王―歌と生涯』(昭51 大和書房)に指摘がある。
- 22 『順集』の詞書には、「あめつちの歌冊八首、もとふぢはらのありたゞあざな藤あむよめる返しなり、もとのうたはかみのかぎりにそのもじを〔すゑたり、このかへしはしもにも〕すゑ、ときをもわかつてよめるなり」とある(括弧内は乙本にて補う)。
- 23 『兵範記』の本文は『増補史料大成』に拠る。
- 24 『倭名類聚抄』の本文は『諸本集成倭名類聚抄 本文篇』(昭43 臨川書店)収載の『箋注倭名類聚抄』に拠る。
- 25 西本願寺本『貫之集』の本文は『西本願寺本三十六人家集』(昭46 墨水書房)の影印をもとに、私に清濁を定めた。
- 26 「源順」あめつちの歌「注釈」(『宮崎女子短期大学紀要』17号 平3・3)
- 27 『儀式』の本文は『増訂故実叢書』に拠る。
- 28 『古語大辞典』(昭58 小学館)の語誌解説に「本来は間投助詞の「を」と同じもので、それを二つ重ねて出来た語と考えられ、熱田本日本書紀の傍訓にも「越々」とあるところからワ行の「を」と認められている」とある。
- 29 『袖中抄』の本文は『日本歌学大系 別巻二』に拠る。
- 30 小島憲之・木下正俊・東野治之氏『新編日本古典文学全集 萬葉集 四』の頭注。
- 31 『元輔集注釈』(平6 貴重本刊行会)
- 32 竹鼻績氏『実方集注釈』(平5 貴重本刊行会)、犬養廉・後藤洋子・平野由紀子氏『新日本古典文学大系 平安私家集』(平6 岩波書店)
- 33 『朝野群載』の本文は『新訂増補国史大系』に拠る。
- 34 武田祐吉氏『上代祝詞の本質』(『武田祐吉著作集 第一巻』昭48 角川書店)では、この相違について「後世の所伝が「申す」の形で伝え直している点は(中略)祝詞の墮落を語るもの

- 35 として注意するに足りる」と述べている。
- 近藤みゆき氏「平安中期河原院文化圏に関する一考察―曾称好忠・惠慶・源道済の漢詩文受容を中心に―」(『千葉大学教養部研究報告』A-22 平2・3)、金子英世氏「初期百首の季節詠―その趣向と性格について―」(『国語と国文学』70巻8号 平5・8)など。
- 36 『宇津保物語』の本文は室城秀之氏『うつほ物語 全』(平7 おうふう)に拠る。
- 37 河野多麻氏『日本古典文学大系 宇津保物語 一』および室城氏前注書。
- 38 『宇津保物語』においては他にも、  
八百万現れたる神は祈ぎつれど君は物聞く時のなきかな  
(菊の宴)  
神も聞け顔変はりせず八百万世に禊ぎつつ思ふどち経む  
(国譲中)
- 39 山本令子氏「宇津保物語」春日社頭和歌に関する一考察」(『和歌文学研究』72号 平8・6)
- 40 順の歌が好忠ほか周辺歌人詠と表現を共有している例も多いが、その一面、歌壇の共有的表現を順が摂取していない例、また順らが好んだ表現を好忠のみが詠んでいない例も存している。詳しくは西山秀人「源順歌の表現―好忠および河原院周辺歌人詠との関連―」(『和歌文学研究』64号 平4・11)、「後撰集時代の屏風歌―貫之歌風の継承と新表現の開拓―」(『和歌文学論集5 屏風歌と歌合』平7 風間書房)を参照。
- 〔付記〕 本稿は平成八年度上田女子短期大学研究助成費にもとづく研究成果の一部である。